



「笑顔・希望」

～明日へ共に歩む～

石巻・東松島交流プロジェクト



浦和学院高等学校では、  
東日本大震災以降、

何を感じ、  
何を考え、  
何を行動するか!!  
ライフスキル教育の原点である。

未曾有の大震災の教訓を教育の中に活かすこと。



第 57 回交流活動「石巻復興きずな新聞配布」 28.07.20～23 石巻・東松島交流センター

## 参加者感想文 「ボランティアに参加して」

3年W組 H. I. (所沢市立東中学校出身)

今回で2回目のボランティア参加でした。参加しよう思ったきっかけは、1年経って石巻・東松島がどう変わったのか、もっと住民の方々と話がしたかったからです。新聞配りの1日目は、久しぶりということもあり、あまり話せなかったり、少しの勇気がでなくて声を大きく出すことができなくて、正直苦戦しました。しかし、ぎこちない会話でも温かくお茶っこさせてもらったり、ゆっくりと待ってくれたり、住民の方々の気持ちがとても温かったです。

2日目は、1日目の反省点から立てた目標を目指して行動しました。1日目と比べると大きい声で声かけ、住民の方々とのおしゃべりも楽しくすることができました。2日目にある住民の方に出会いました。ご夫婦で住んでいて、毎回新聞をととても楽しみにしていると喜んでくれました。長い時間お茶っこさせていただき、沢山のお話を聞きました。津波にのまれて家がなくなり、死ぬ思いをしたこと。地震で学んだ災害袋にいれておかなくてはならない物、それ以外にも、お父さんが船乗りでたくさんの友達がいる、外国にも知り合いがいること。あっという間に時間が過ぎてしまうほど、話に夢中になりました。最後には愚痴を私たちに言ってくれて嬉しかったです。

1年前と比べると空き家が増えて寂しくなったと感じました。しかし、石巻の道路には沢山のトラックが走っていたり、作業服で仕事もしていたり、石巻の復興のために頑張っている人を見たり、マンションを建てていたり、沢山の人が頑張っているんだと改めて気づかされました。あごらさんやのり工房の人たちも、埼玉からきた私たちを明るく迎えてくれて嬉しかったです。大川小学校で畠山先生のお話を聞いて、今自分が家族と過ごしていること、家があること、生きていることのすばらしさに改めて気づくことができました。

3年W組 S. S. (川口市立十二月田中学校出身)

7月20日～23日、石巻・東松島に浦和学院ボランティアとして参加させていただきました。私は行く前と行った後ではかなり変わりました。上手く言葉にすることが出来ませんが、皆に伝えられる全てを伝え、石巻・東松島のことを知って欲しいと思いました。

石巻市南浜では、テレビで流れていた景色を思い出しました。ここは震災の時とはだいぶ変わり、少しずつ家が建っている様子が見て分かりました。私は看板を見つけました。そこには、May Peace Prevail On Earth と書いてありました。世界人類が平和でありますようにと。私はこの文字を見て泣きそうになりました。震災を体験し、経験した人にしか言えない言葉のように感じ、とても重く考えさせられました。

2日間仮設住宅で新聞配りをしました。仮設住宅での新聞配りでは、インターホンを押し、大きな声で「こんにちは！きずな新聞をお届けに来ました！」と言いました。インターホンが壊れていることが多かったので、ノックをしました。1日目は涼しかったので、「今日は涼しいですね。いつもこのくらいの気温なんですか？」などと言って会話をはずませました。ボランティアをするにあたって、する側は相手のためを思う気持ちと気遣いが大切だと感じました。見やすいようにポスティングをする際には、仮設きずな新聞の文字を前にするなど、工夫をする所がとても良いと思いました。あきさん、しげさん、あいさん、たくまさんなどボランティアを長く経験する方々だからこそわかることでもあり、尊敬しました。2日目は上手に話すことができず、しーんとしてしまったり、「ありがとう」と言われて「はい」としか答えられませんでした。ミーティングをした時に、何をどう感じて、このようなことを言われた時どのような対応をしたかなど、質問された時に一つも答えられなかったので、参加2回目の友達に色々話を聞いて3日目に活かしました。

話をして下さった方の特徴は、優しくとても穏やか。話していて笑顔になれることが多く、そこで感じたことは、お茶っこをさせていただいて、時間が経ってから当時の話をして下さる人がほとんどだったので、「ボランティアにきてくれた＝当時の話をしなくてはいけない」「当時の話をしてもらうためにボランティアをしている」などとは思われていないことがわかりました。だから、自分からは聞かずに、話して下さった方には一つ、二つと失礼のない質問をしました。仮設に住む方は皆それぞれ傷は違って、家も家族も失った人もいれば、家だけを失った人もいました。私も今この瞬間までは、家族と家で幸せに話していますが、3分後には家も家族も失っている、そんなことを想像しても出来ず、私一人残された身になると、何のために生きるかさえ見失ってしまうのではないかと怖くなりました。

最終日、大川小学校に行った時、本当に言葉が出ませんでした。帰ってから、当時の大川小学校の津波の様子を見ましたが、自然は恐ろしい、そう思ってしまいました。畠山先生が言っていたことは、「埼玉には海がなくて良かった。でも、これだけは言うておく。すぐ逃げること！」目の前で亡くなった人を見たとき、さらに言葉を失いました。

私はこの3日目、とても良い経験をしました。テレビで見るものと肌で感じるものが大きく違いすぎました。伝えたいことは沢山あります。「もっともっと石巻・東松島のことを皆に知ってもらいたい。生で感じてほしい。」私はただそう思いました。今回のボランティアで私の力が、誰かに少しでもパワーとして与えられるとすれば、とても嬉しいです。そして、ボランティアができたのは先生方の裏方での準備、親が出してくれたボランティア参加費、そして今までボランティアを続けてくれた先輩方々、優しく心を開いてくださった石巻・東松島の方々、ボランティア活動を計画してくださったスタッフ・プロの方々のおかげだということを忘れず生きていこうと思いました。



3年G組 H. Y. (越谷市立富士中学校出身)

私はボランティアに参加して、学んだことが2つあります。

一つ目は被災地の現状です。行く前はテレビでも報道されなくなり、仮設住宅もほとんどなくなっていると思っていました。でも実際は、1つの団地に半分くらいは住んでいる人がいて、復興公営住宅に引越すメドもたっていない人もいました。仮設住宅に住んでいるほとんどの人が、津波を実際に見て、家族を亡くされた人もいました。津波がどんな色で、どれくらい高く、どのように逃げたのか、細かく教えてくれた人がいたり、家族を亡くされて、その家族から守られた不思議な体験をした人がいたりしました。「震災にあった」といっても、人それぞれ体験したことやその人の気持ちはそれぞれ違うことを改めて知りました。

大川小学校では、学校の周りの住宅街が家の土台から無くなっていて「家があった」と言われなければわからないほどでした。小学校も津波の影響でゆがんでいたり壁がとれていたりして、原形がわからないほどでした。畠山先生のお話を聞いて、一人でも必死に逃げようとした子ども、どうしたら良いかわからない先生、心配する親、津波にのみこまれて行く人々が鮮明に想像できました。畠山先生の「自分の命を先生や親に託さない。自分の命を守れるのは自分だけ。」という言葉がとても心に響きました。みんながこの言葉を知っていたら、亡くなった人が少しは減っていたと思います。この先、この言葉を少しでも広められたらいいと思います。

二つ目は、被災者の気持ちです。仮設住宅に行ったとき、とても印象に残った方がいます。その方は家族全員助かったけど、避難所でも生活が大変だったと教えてくれました。避難所に着いてから一週間食事なし、十日間お風呂なしの生活でした。食事が届くようになって、子どもが優先だったり、市長や議員が来てくれても口だけで何もしてくれなかったそうです。仮設住宅や復興公営住宅ができてからも「仙台はすぐ移れたのに、何で石巻は遅いのか。」「石巻の市役所はやる気がないのか。」と思ったそうです。被災地の対応はどこも同じと思っていたし、こんなに辛い生活だと想像していなかったのもとても驚きました。そして被災者の声を直接聞いて、知らなかったことが多すぎたので、もっとたくさん話を聞いて、これから起こる災害のためにできることを見つけたいです。どの災害者も共通して言ったのが「話を聞いてくれるだけで嬉しい。」という言葉でした。なにかして欲しいとか元気づけて欲しいとかではなかったのが意外だと思いました。この言葉を聴いて、自分は何かしてあげられることがなくても、被災者の気持ちを少し楽にしてあげることではできるんだなと思いました。

これらのことを家族や友人に伝え一人でも多くの被災者の気持ちを救いたいです。そして、このボランティアで学んだことを、今後起こるかも知れない災害や防災、今後の人生において、人の気持ちを理解したり、人のために何かすることができるよう、活かせばいいなと思います。



2年T組 K. K. (上尾市立南中学校出身)

私は、7月20日～23日のボランティアに参加し、去年に引き続き2度目の参加でした。活動内容、その他ほぼ同じ活動をしました。去年とは違った気持ち、また改めて思いを感じることもありました。

被災地に着き、町並みや殺風景な草原など、去年とは差ほど大きな変化は無かったように思いました。被災地の多くには、必要最低限と思われるお店、地域、栄えているようなところには町を盛り上げるための工夫が見え、少しの余裕を受け取ることができました。しかし、それが現段階の限界のようにも思いました。去年との違いをさらに感じたことは、去年の私は、4年半で被災地はかなり「復興」してきているんだな…と書いていたのですが、今回2度目の参加をして、改めて「復興」について考え、何が「復興」したことなのか、不自由なく生活すること、仮設から出ること、元の家に戻りまた生活すること…など、住民の方々それぞれだと思いますが、5年半経った被災地を見て「復興」が進んだとは全く言えないような気がしました。数年後、数十年後も同じく、不満は減りもとの状態に近づきはしても完全に戻ることには考えにくく、100%の「復興」というものは無いのではないかと思いました。

そこから私は、今回のボランティアでは、不満などをひとりで抱えている人の時間や、寂しいと感じてしまう時間を減らすという目的を持ち、新聞を配ることにしました。このボランティアを迷惑だと私たちに直接愚痴をこぼすおばさんもいましたが、愚痴を聞いていると考えると、少し役に立てたかのように思えました。終わりには、地域住民のイベントにも「来てよ!」とってもらうこともでき、初対面ながらも愚痴を聞き、イベントの誘いの声もいただき、受け入れてもらえたかのように思えました。そして、いつの間にか私のほうが「ありがとう」という場面が多くありました。その場では、感謝と申し訳なさがありました。振り返り(反省会)の時に、「人ははありがとうと言われたい生き物だと思うし、被災当時大きな存在であったボランティアさんに沢山のありがとうの気持ちがあったから、少しの余裕が出てきた今、ありがとうと言われる方が住民の方々も嬉しいのかもね!」という、あきさんの言葉にとても強く共感するものがありました。少しは良いことができたのではないかと、とても嬉しく思いました。

ボランティアという形以外でも、マイナスをプラスに変えられるように、このボランティア経験を活かしていきたいと思います。

石巻・東松島の現状を見て、自分が想像していたより、復興していました。ただ、建物が多く復興が進んでいる地域、瓦礫があり、人・車の通りが少なく復興が進んでいない地域の差があると感じました。しかしこの5年で、最初テレビで見た状況から考えると、地元の人・ボランティア等多くの人の協力があって、ここまで復興する事が出来たんだと改めて感じる事が出来ました。

復興きずな新聞配布を行って、仮設に越してきてから姉が亡くなった方、仮設に越して離婚した方、震災前200人の友人がいたのに今は3人になってしまった方等…私はただ話を聞いて頷くばかりでした。今まで、きずな新聞は沢山配布されているから何度も話しをしていると思いますが、今回も少しでも、聞く事で相手の気持ちが良い方向へ向かってくれて頂けたら嬉しいです。

この経験を通じて、私は家・仕事があり、給料を頂いている事、友人と遊べる事、いつも過ごしていた何気ない当たり前の日常が、幸せな事なんだと実感しました。大川小学校では、言葉では表せない感情がこみ上げてきました。私の悩みは、こんなことで悩んでられない、自分がいかに甘えていたのかを痛感しました。



事務部労務管理係  
内田陽香